みんなで語ろう民放史

題字　中川　順

「許し難きを許す」

～フィリピン収監旧日本兵　帰国の陰で～

エルピディオ・キリノ大統領

モンテンルパから帰還した戦犯の出迎え 1953.7.22-横浜港-

加納莞蕾(1904～1977)

荒川　和也（ＢＳＳ）元報道部長

●はじめに

「許し難きを許し、憎しみの連鎖を断ち切って、次の世代で平和を築く礎にしよう」

先の大戦後、戦犯死刑囚の恩赦を願ってフィリピン大統領に、独自の助命嘆願と平和への提言を続けた画家が島根県の安来市にいた。

名は加納莞蕾（本名 辰夫１９０４～１９７７）というが、その存在は殆ど知られていない。

戦後70年を機に、加納莞蕾（以下、莞蕾と記す）の４女佳世子さんが、自らの体験と、眠っていた資料を元に父親の伝記を出版した。

伝記は、画家が送り続けた英文の嘆願書２２８通、その返書75通を骨子に綴られている。

莞蕾の伝記を出版した4女佳世子さん

『ああモンテンルパの夜は更けて』その悲しいメロディーが、当時のエルピディオ・キリノフィリピン大統領の心を動かし、日本人戦犯が許されて帰国へ…。

モンテンルパのNBP刑務所(フィリピン)

映画やテレビ、演劇などで年輩の方ならこのエピソードを知っている人は少なくない。

ところが、いかなる組織や団体にも属さない市井の一私人が残したその資料を吟味すると、歌にまつわるエピソードとは全く違った戦犯恩赦の様相が浮かび上がる。

●番組の概略

何故このような素材が、昭和史の中に埋没していたのだろうか？

番組は、莞蕾の一生を縦軸に、横軸には、家族の苦悩や、その時々のエピソードなどを織り込んだ。

従軍画家だった中國での経験が戦後の助命嘆願運動の伏線となる。

戦後、同郷の元海軍少将と出会う。その少将がフィリピンの軍事法廷で見せた高潔で責任感あふれる態度に心を打たれ、嘆願運動の引き金になった。

画家としての筆を折って、その活動に没頭しただけに、経済的に困窮して、家族は離散。

以来4年余り、ついに、キリノ大統領は莞蕾の嘆願に応えたとも受け取れる声明を発表し、105人の戦犯すべてを許した。

《「許し難きを許す」》…大統領のヒューマニティーを、平和を築く礎にしようと、命の限り尽くした画家・加納莞蕾の人生に迫った。

●フィリピンの戦争犠牲者

太平洋戦争の激戦地となったフィリピン。戦争末期の1944年10月、アメリカ軍が、日本に占領されていた植民地を取り返すべく大軍で上陸。特にマニラでは激しい市街戦となり、当時上院議員だったキリノ氏は、妻と3人の子どもを、日本兵の狙撃で失った。

キリノ一家

この戦争で犠牲になったフィリピンの民間人はマニラだけでも10万人。総数約1700万人の人口のうち、110万人にも達したといわれ、反日感情は最悪を極めた。

●日本兵の軍事裁判

戦後間もなく、アメリカから独立したフィリピンは、一般市民を虐殺した、いわゆるBC級戦犯裁判をアメリカから引き継ぎ、日本兵を裁くことになった。

被告は151人。軍事裁判は、過半数の79人に死刑。被告全体の9割が有罪という厳しい判決を下した。

●助命嘆願運動決意のきっかけ

莞蕾が助命運動を決意したのは、戦犯裁判執行中の1949年3月27日。45歳の時だった。前述のように同じ島根県出身の古瀬貴季元海軍少将が、フィリピンの軍事法廷で潔い態度見せたことを新聞報道で知ったからである。

罪状は、民間人152人虐殺事件の指揮官責任だった。実は古瀬は事件に関わっていなかったといわれている。

しかし、同じ事件で罪に問われた部下の裁判では、日本軍の指揮命令系統を説明して「どうしても罰しなければならないなら、自分だけを罰せよ」と主張。また自らの裁判では、最初の公判で訴因の全てに有罪を認め、銃殺刑の判決を受けた。

古瀬貴季海軍少将(遺族提供)

古瀬が法廷で見せた態度は、検察側を始め、フィリピンの関係者に感銘を与えたと伝えられている。

実は、莞蕾は終戦直後、古瀬と面識があった。松江地方海軍人事部の仕事をしていた関係で、1946年2月、戦犯指名を受けて巣鴨プリズンに向かう少将を安来市の国鉄・荒島駅で見送った。その時、古瀬が日本軍のモラルの荒廃を嘆くのを聞いていた。

莞蕾も従軍画家として中国の山西省を行軍した際、日本軍の残虐行為などを見聞していた。それだけに、古瀬が法廷で見せた高潔で責任感あふれる姿は、莞蕾の胸に突き刺さった。

●行動の人 莞蕾

助命運動を決意して4日後、早くも莞蕾は5歳の娘(伝記の著者・佳世子)を連れて東京にいた。

可能な限りの方策を尽くして、助言と協力を求めて回った。しかし、支援する組織や団体のない莞蕾に協力者は見つからなかった。

四面楚歌の莞蕾に、唯一助け船を出したのは、師範学校時代の1年先輩、小滝彬だった。小滝は外交官を経て、当時通産省の初代通

商監の要職にあった。彼の計らいが、嘆願の道を開くことになる。

当時の日本政府は、講和条約も締結されていない段階で、役人が減刑運動に直接関わることを禁じていた。連合国の誤解を招くことを恐れたからである。

小滝彬　通商監

貿易を統括する立場にあった小滝は、フィリピンの事情に明るく、一計を案じた…フィリピン大使館の前身である代表部トップ、ベルナベ・アフリカ公使の肖像画を莞蕾が描くというものだ。

英語は話せないが、肖像画が完成するまでの2週間、幼子を連れて、フィリピン代表部が入居する銀座の服部ビル（和光ビル）通いが始まった。幼子はその場の雰囲気を和らげ、大使館の職員たちと友好関係を深める潤滑油となった。

アフリカ公使の肖像画が完成すると、莞蕾は「日比友好の一助になれば…」と財布をはたいて求めた高価な額縁に入れてプレゼントした。

アフリカ公使は、莞蕾がキリノ大統領に戦犯の助命嘆願書を送り始めた矢先であることを知るが、それは小滝通商監のフォローであった。公使は、莞蕾が大統領に発送済み嘆願書の内容を確認すると、以後大統領宛の嘆願書は、フィリピン代表部経由で、責任を持って届けると約束。いわば莞蕾は自らの人間力で、信頼関係を築いたのである。

彼が東京で活動したのは、最初の9ヵ月。その後は島根県安来市の実家に戻って、嘆願書を送り続けた。戦犯死刑囚の、家族でも親戚でもない立場の人間の嘆願は異例であった。

●大統領への嘆願

永井均著『フィリピンBC級戦犯裁判』から、莞蕾の嘆願のポイントを、コンパクトにまとめた記述を引用する。①莞蕾の嘆願は、戦犯の助命だけを究極の目的とするものでなかった。フィリピン側からすれば、本来〈赦されざる者〉であるはずの戦犯を全員赦してもらうことで、日本国民が「過去を反省、懺悔し、積極的に軍国主義を拒否して罪悪の根を断ち切る」いわば赦免を「新生日本のモラルの確立」の契機として、日本が世界平和に貢献する方途を探ろうとした。

②〈目には目を〉という復讐からは平和は生まれない、との考えに基づき、キリノ大統領に対し、日本軍に殺された「貴下の愛児の名において」「赦し難きを赦す」英断を乞うた。

③自分自身も戦犯とともに裁かれ、赦しを乞う身であるとして、戦犯全員が裁かれるその日まで、画家としての筆を折ることをキリノ大統領に宣言した。

莞蕾の代表作『戦争画』昭和19年（1944年）発表
京城（今のソウル）で開かれた
決戦美術展の最高賞を受賞

莞蕾は「ヒューマニズムに反する戦争画は描いていない」と家族に話していた。

しかし、そのストイックな嘆願活動を知ると、従軍画家としての贖罪感が背景にあると思われてならない。

●莞蕾の肉声テープ

戦争をテーマにした番組制作は、映像化に苦心する。

ところが今回は、映像ではなく主人公の大量の肉声テープ72時間分が残されており、その処理にうれしい悲鳴。

嘆願運動を語った
莞蕾の録音テープ

晩年、莞蕾が、師範学校時代の友人に語った録音テープには、嘆願活動の節目々々で、何を考え、どう行動したか、貴重な証言が詰

まっていた。例えば、許しを願う考え方を集大成した第四嘆願書を送った時の心境である…「大統領に対して、今は亡きあなたの愛児の名において、全ての罪と罪人を許せと。こういうことはね、あなたの奥さんや子どもさんを殺した日本人の立場から言える言葉ではない。だが私は敢えて言う。私の信仰において言うことは、あなたはまさにかくなすべきではあるまいか。それが親として人間として、最後の最大の愛ではないか。涙ながらに書いたな…」キリノ大統領が敬虔なクリスチャンであることを知り、最初の3通とは違って、キリスト教徒に通じる言葉で訴えたという。

番組にリアリティーを持たせることが出来たのは、このテープが残されていたお蔭だった。

●フィリピン取材

フィリピン取材も重要なポイントだった。事前のリサーチでは、「随分年月が経っており、キリノ大統領の名を知る人も少ない。ましてや莞蕾のことは誰も知らない」とのこと。

天を仰ぐ気持ちになったが、「駄目元」で向かうしかない。

キリノ元大統領の孫のルビー・キリノさんにインタビューしたときのことである。莞蕾のことは、彼女には伝わっていなかったが、マニラ市内の民間ライブラリーで入手した莞蕾の嘆願書のコピー（大統領宛第26書簡）を渡すと、真剣な表情に変わった。黙読した後、「ビューティフル レター」とつぶやいた。

莞蕾の嘆願書を見る
ルビー・キリノさん

莞蕾は、このような嘆願書を43通も大統領に送り続けていたと補足してマイクを向けると、「政治家でもない人が、43通もの嘆願書を、見返りを求めることもなく、人生のより高い原則を求めて書いたことは明らかです。そのことはきっと、祖父の大統領に大きな影響を与えたに違いありません」手応えを感じた一言だった。

この取材がきっかけで、その後、キリノファミリーと、莞蕾の4女 佳世子さんの初対面が実現することになる。

ルビー・キリノさんと佳世子さん初対面
（2015.11フィリピン・マニラ）

●許し難きを許す

その決定が発表されたのは、1953年6月27日、キリノ大統領が悪化した胃潰瘍の手術を受けるため、アメリカに出発する日であった。

フィリピン共和国憲法に規定された特赦・減刑の権限に基づいて、モンテンルパの刑務所に収監されていた日本人戦犯105人全員を許し、日本に送り返すことになった。

特赦の理由を、空港に駆けつけた日本のマニラ在外事務所の所長に「キリスト教精神」によるものと述べた。さらに7月6日には、自ら大統領声明でその理由を語っている。その全文を記す。

「私はフィリピンで服役している日本人戦犯に対し、フィリピン議会の承認を必要とする大赦ではなく、特赦を与えた。

私は日本人に妻と3人の子供、さらに5人の親族を殺され、彼らを許そうとは、よもや思ってもみなかった。

私の子供や国民に恒久の利益をもたらすであろう日本人に、憎悪を受け継がせないためにこれを行うのである。結局、運命が日本とフィリピンを隣人となさしめた。

私はキリスト教国の長として自らこのような決断をなしえたことを幸せに思う。私を突き動かした善意の心が人間に対する信頼の証として、他者の心の琴線に触れることになれば本望である。

人間同士の愛は、人間や国家間において常に至高の定めであり、世界平和の礎となるものである」

莞蕾の膨大な嘆願書を紹介する紙幅はないが、冒頭で記した「許

し難きを許し…」という嘆願のエッセンスがよく反映された大統領声明である。

大統領声明の直後、マラカニアン宮殿の大統領私設秘書官から莞蕾に1通の返書が届いた。それは大統領特赦に対して莞蕾が送った書簡への礼状。最後にこんな一文が添えられていた。

「(特赦は)日本人戦犯の死刑の執行は行わないとする2年半前に決定した大統領の政策と一致するものであります。」

2年半前は、1951年2月頃。『ああ、モンテンルパ…』の歌がレコードで売り出されたのは52年9月である。つまり大統領はレコード発売の一年半以前に、死刑執行をしない政策を決めていたことになる。大統領声明も合わせて考えると、この歌にまつわるエピソードは「特赦」の真相とは思えない。

キリノ元大統領(右)と会見した莞蕾(左)
(東京帝国ホテル1955.6)

●驚きの展開

「憎しみを愛に変える」大統領の考えこそ、世界平和に繋がる。「フィリピンの戦犯問題の帰結点は、『世界児童憲章の制定』である」そう考えて活動を続けるなど莞蕾の平和を願う想いは尽きることがなかった。

歴史の中に埋没しそうになっていた、キリノ大統領と莞蕾の交流に動きが出た。

BSSの取材がきっかけで、「二人の男性の記憶を大切にしよう」と、意気投合した、ルビーさんと佳世子さんが対面。テレビや新聞で一連の報道を知ったマニラ日本大使館などの計らいで、驚きの展開に…

ルビーさんは今年1月、天皇皇后両陛下のフィリピン訪問の際、歓迎式典で初対面した。

天皇陛下が「キリノ大統領は日本人に非常に特別な方です。特赦を与えて下さったことを忘れません。」と話されたと言われ、ルビーさんの目に涙が溢れていた。

6月には東京の日比谷公園に、キリノ大統領の顕彰碑が建立されるなど、「特赦」を見直す動きが続いている。

キリノ大統領の顕彰碑除幕式(東京日比谷公園2016.6)
前列左側からルビーさん、佳世子さん

●あとがき

戦争を題材にした私の番組づくりは、定年再雇用の頃からであった。きっかけは、デジタル化が進み、小さなカメラと、パソコンで自由に番組が作れるようになったからである。

自前で機材をそろえ、テレビ各社がどこも取り上げない題材を、一人で番組にしてきた。積み重なって今回が4作目。

古希を迎え、頭と体の自由度が次第に低下しているのを実感するが、脳細胞を刺激する題材がアンテナに架かれば、また動き出すかもしれない。

戦争で何が起きたのか。知らないことが実に多い。まずは知ること。そして伝えることが大切だと思うから。

莞蕾と4女佳世子さん(1965年)

【資料提供・協力】
加納美術振興財団
永井　均(広島市立大学　教授)
広島平和研究所
加納佳世子　BSS　筆者